

古道調査・秩父往還（二瀬から大久保地区及び宮平）下見調査報告書

2021. 07. 09

日 時：令和3年6月17日（木曜日）

メンバー：L. 松本敏夫、浅田 稔、本村貴子、宮崎 稔（資料提供）

6月17日（木）：小雨～曇り～晴れ

コース記録：

二瀬ダム駐車場（9:00 - 9:34）～二瀬隧道（9:40）～登山口・道標「栃本 6.4km・大黒山を経て大峰 4.8km - 秩父湖 0.3km」（9:42）～テニスコート・展望広場（9:49）～送水管上部の陸橋（10:00）～送水管右隣の旧秩父往還（10:04）～妙見宮・稲荷神社（10:19）～送水管上部（10:31）～神社の幡棒（10:36）～大杉・水飲み場（10:40）～大師堂（10:45）～大久保地区中心（10:54）～大滝げんきプラザへの車道に合流（11:06）～車道分岐「中津川 - 大滝げんきプラザ・栃本」（11:18）～道標「秩父往還・至落合」（11:20）～龍泉寺・滝沢神社「ふるさとの丘公園」（11:23）～道標「秩父往還・至落合 - 秩父往還・至栃本」（11:23 - 11:48）～コショウ坂・弘法ノ一杯水（11:58）～植林用の林道に合流（12:14）～谷に設置された水路で通行不可（12:17）～旧秩父往還のルート不明瞭につきルート確認（12:18 - 12:54）～ふるさとの丘公園（13:23）～大杉（13:55）～送水管（栃本発電所）の上部（14:00）～妙見宮・稲荷神社（14:08）～旧秩父往還から駒ヶ滝不動尊への分岐（14:13）～駒ヶ滝不動尊（14:17）～二瀬ダム駐車場（14:23）

記録

日本山岳会の山岳古道調査プロジェクトから提示された埼玉支部担当の第一次山岳古道調査対象は、「雁坂峠越え」及び「十文字峠越え」です。両峠越えの起点となる場所は秩父市栃本（川又も可）になります。旧秩父大宮から栃本（川又も可）に至る旧秩父往還のうち、麻生（二瀬ダム）から栃本間は、旧道が旧国道140号線として現在も利用されている車道であり、古道として一般の登山愛好家が迷うことなく利用可能な古道と考えられます。そこで今回は、旧秩父大宮から麻生に至る区間のうち、中津川沿いの宮平（または落合）からの旧秩父往還が通行可能か否かを調査することを目的としました。明治43年測図の5万分の1地形図「三峰」には、宮平から標高500m前後の山腹を巻き、大久保地区へと続く旧秩父往還が記載されています。しかし、秩父から川又までの車道（国道140号）の開通に伴って、宮平から麻生に至る旧道は利用されなくなり、また、滝沢ダム（奥秩父もみじ湖）の建設や中津川沿いの集落移転、森林伐採や植林用の林道造成等により、宮平から大久保地区の旧道は地図上から削除されたものと推測されます。

また、旧秩父往還に関する古道調査に際し、基本的に「歴史の道調査報告書・第11集・秩父甲州往還（埼玉県教育委員会）」（以後、「秩父甲州往還」）の調査記録を参照いたしました。

今回は、二瀬ダム駐車場から旧秩父往還に登り、大久保地区を経由して宮平への旧道を実

地に歩いて調査することになりました。調査担当者 3 名が雨のほとんど上がった二瀬ダム駐車場に集合しました。下草の濡れ防止に雨具を着用し、駐車場から二瀬ダムに向かって進み、二瀬隧道を越えると、右側に登山口の道標「栃本 6.4km - 大黒山を経て大峰 4.8km - 秩父湖 0.3km」が現れ、旧秩父往還への分岐となります。



二瀬隧道



ジグザグの登山道入口



登山道入口の道標

ここから鉄製の手すりの付いたきわめて人工的な登山道をジグザグに辿り、眼下に広がる秩父湖を眺めながら北西方面へ一気に登ります。二瀬ダムの完成は昭和 36 年（1961）12 月、秩父湖の命名は秩父宮妃とのことです。古いテニスコートを越えると展望広場ですが、東屋（六角形の建物）なども草に覆われて荒れ放題の状況でした。コロナ禍の状況の下でなければ、子供たちの笑い声が響き渡ったであろうと想像できます。展望広場の入口右側の草深い登山道をジグザグに登っている時に、同行者が登山道に鹿の角が落ちているのを拾いました。如何に鹿が増えているか、民家のすぐそばまで鹿が入り込んでいることから推測できます。まもなく「展望広場入口」及び「秩父湖バス停」標識のある広場にでます。送水管上部を陸橋（東京発電株式会社の表示）で渡ると、車道に出る直前に「大峰山・栃本方面 - 秩父湖バス停」の道標があります。ここは大峰山への登山コースの一部となっています。



テニスコート跡



展望広場の東屋



送水管の陸橋

旧秩父往還は送水管を渡る陸橋の手前を右に進みます。道標はないので、地図で現在地確認が必須です。旧道は、山側に金網の落石防止ネットが張っており、谷川は一部に手すりが設置されていて、夏草に覆われてはいますが、水平な道幅 1m は十分にある広さです。



送水管の下部



旧秩父往還



旧秩父往還

西に張り出した尾根の先端に朱塗りの鳥居の稲荷神社と金属製の黒い鳥居の妙見宮とが一つの社に並んで鎮座しています。新編武蔵風土記稿・古大瀧村（以後、風土記稿）の条に「妙見社 大久保組にあり、その所の鎮守とす、村持、例祭九月廿三日」と記されていますので、江戸時代から厚く信仰された大久保地区の鎮守であることが分かります。神社の石段途中の左手に地藏尊（？）石仏（仏像の左右に文字が記されていますが判読不能）及び石の角柱でできた月待塔（「秩父甲州往還」記載の奉待月天子供養？）があり、神社の前には二十二夜塔（弘化二年）があります。二十二夜塔は、如意輪観音を本尊とする女人講（二十二夜講）として、悪病退散・安産などを祈願して建てられた月待塔の一種です。神社や石仏が残されていることから、この道が旧道であることを裏付けるものと考えられます。



稲荷神社と妙見宮



月待塔と地藏尊（？）



二十二夜塔

この先で送水管（栃本発電所）上部を陸橋で渡ると大久保地区に入ります。山肌にへばりつく様に民家が散在し、奥秩父の山深さを感じられる風景が陸橋から望めます。大久保地区入口に神社の「幟（のぼり）旗」を立てる幡棒が旧道をまたいで二本立てられていました。幡を納めた建屋（？）が付随しているので、八坂神社とも推測されます。しかし、大滝村誌に「龍泉寺からの車道を下ると大久保の八坂神社に出る。その先、右側に杉の大木があり、根元に『下井戸』と呼ぶ泉がある。」と記され、大杉よりも宮平側に神社は位置するものと考えられます。また、「秩父往還いまむかし」には、「峠（現在の龍泉寺の場所）から車道を下って大久保へおると、集落中ほどに火伏せの八坂神社がある。」と記されています。これらの二つの情報から、八坂神社は大久保地区の中心部に存在すると推測されますが、今回の調査では確認できませんでした。旧道左側に大杉が石垣に組み込まれた形になって存在し、大杉の前に井戸（泉）があり、奥に比較的新しい石祠（水神様？）が祀られています。大滝村誌に記載の「下井戸」と比定されます。更に「秩父往還いまむかし」には、「大久保

を出はざれると、すぐ右の大杉の根元に小さな井戸がある。・・・昔はここで小荷駄の馬が休息し、麻生や宮平方面へ向かって行った。」と記され、歴史のある大杉と馬の休憩場所・水飲み場であった「下井戸」は現在もその存在が確認できます。



送水管上部



大久保地区入口



大杉と下井戸と石祠

旧道左側上部に比較的新しい建築と思われる大師堂があり、堂の左に石仏石碑三基「二十三夜塔（明治三十六年、十二月廿三日、世話人千島久太郎）、地藏尊（享保七年）、如意輪観音（損傷が激しい）が並んでいます。大師堂は「秩父甲州往還」に記された霊仙院跡でしょうか？「秩父往還いまむかし」には、霊仙院は明治20年頃火災で燃えてしまい、跡地に大久保公民館があるとされ、大師堂と公民館の間の道を「寺坂」と呼んでいると記されています。地図によると現在の久保区集会場（霊仙院跡）は大師堂の西上方に記載があります。しかし、自然石でできた「三界萬霊等」は存在しますが、集会場（公民館）は確認できませんでした。また、風土記稿には「霊仙院 大久保組にあり、大黒山と號す、臨濟宗にて甲州山梨郡向嶽寺末、本尊將軍地藏、開山松隠祖願応永十四年十月十四日示寂」と記されている臨濟宗の向嶽寺末であり、大滝村と甲州との強いつながりが感じられます。また、「大滝村誌」や「秩父往還いまむかし」に火伏の神と紹介されている八坂神社もまた確認できませんでした。地区のはずれで、たまたま出会った住民は「川又の奥の入川で生まれ、そこより開けた大久保に嫁に来た。」と話し、八坂神社や霊仙院について伺ってみたが、「どちらも記憶ない。」とのこと、「祀りは妙見宮で行っている。」とのことでした。結局、八坂神社と霊仙院跡も今回の調査では残念ながら確認できませんでした。



大師堂



石仏石碑三基



旧秩父往還

大久保地区中心部の分岐の左側手前に、屋根の付いた掲示板のような建物があり、しめ縄に紙垂が下がり、三峯神社のお札が三枚「御祈禱・火伏・盗賊除」が張ってあります。この付近が八坂神社の跡でしょうか、詳細は未確認です。



三峯神社のお札



大久保地区の中心



大滝げんきプラザへの車道

大久保地区の交差点を直進（東へ）すると、旧道は杉の樹林帯に入り、降りながら右からくる大滝げんきプラザ方面に向かう車道に合流します。背後に桃源郷のような大久保地区が見渡せる開放的な車道を進むと道標「中津川 - 大滝げんきプラザ・栃本」があり、左折する大滝げんきプラザへの車道が分岐しています。この先の左下に、黄土色の比較的新しい道標「秩父往還・至栃本」及び「秩父往還・至落合」が分岐に設置されていました。道標に従い左折して狭く細い山道を登ると、すぐに龍泉寺裏の墓地に出ます。

龍泉寺の石門柱の背後に記された趣意書には「大黒山龍泉寺の開基は寺伝によれば人皇第百代後小松天皇の御宇龍天祖見が応永年間（1394～1428 年）に滝の沢に創建したと伝えられ、正観世音菩薩を本尊としている。この間、歴代住職はじめ多くの檀徒方に守られ今日に至ったが、この度の水資源開発公団滝沢ダム建設事業により移転を余儀なくされ、この地に再建したものである。これを機に当時院の益々の隆昌を願うため、横瀬町宇根地区有志相寄りこれを建立する。」と刻されていました。門柱を建立した横瀬町宇根地区と滝ノ沢地区との関係は未調査ですが、ダム建設に伴って「滝ノ沢」から「横瀬町」に移転した住民によるものとも推測されます。

また、風土記稿・古大瀧村の条に「龍泉寺 瀧之澤にあり、大黒山と號す、本尊十一面観音、開山祖乾永和元年三月四日示寂」と記され、滝ノ沢にあったことが確認できます。しかし、開山や本尊に趣意書と風土記稿とで違いがあるのはいかなる理由によるものか、興味を惹かれます。龍泉寺の本堂前に置かれた屋根付きで金属製の大きな焼香台（？）に後北条氏の「みつ鱗」紋が彫られているのを同行者が発見しました。奥秩父は戦国時代末期に、豊臣秀吉に攻められて後北条氏の拠点であった鉢形城が落城し、多くの武士たちが奥秩父の山村に落ち延びたとの伝説が残ります。中津川や大久保・麻生・栃本などにも鉢形城の落人の痕跡が残っていても不思議はありません。平家の落人伝説はどこでも話題に上りますが、奥秩父には後北条氏所縁の落人伝説が良く似合います。



秩父往還への分岐



龍泉寺



滝沢神社

「ふるさとの丘公園」記念碑によると「滝沢ダムは、昭和四四年に建設省（現「国土交通省」）により計画され、昭和五一年の水資源開発公団（現「独立行政法人水資源機構」）への事業承継・平成十年度の本体工事着手、平成十七年度の試験湛水開始を経て、平成二十年度から管理に入りました。建設に関係した事業用地に居住された四集落百十余世帯の方に移転して戴くと同時に、各集落に存在した神社・仏閣・寺院・神楽殿について、移転住民や関係者との協議より、ここにこれらの経過を記し、移転して戴いた世帯の名を刻み、永く記念とするものです。」と滝沢ダム建設のため立ち退きを迫られた経緯が示されています。



ふるさとの丘公園



移設された石仏・石碑



記念碑

一方、滝沢神社が併設されていて、その遷座記念碑には「滝沢ダム建設に伴い当該地域に先祖代々地区住人の守護神として鎮座してきた諸々の神仏石碑類を此処ふるさとの丘に遷座し懇ろに合祀する。 廿六地区：神明神社・白岩神社・大神様・天狗様・稲荷様・天王様・薬師様・他石碑類、 滝ノ沢：龍野神社・稲荷神社・天狗神社・地藏様・水神様・神楽殿・他石碑類、 浜平：龍野神社・諏訪神社・天神様・八幡様・稲荷様・天口様・大黒様・観音様・他石碑類、 塩沢：諏訪神社・水神様・天皇様・地藏様・稲荷神社・他石碑類」と刻されていました。神社の左側に仏殿のような建物があり、中には地藏尊石仏・石の仏像・絵馬・観世音菩薩と記された奉納額などが納められています。仏殿の前に並べられた夥しい石仏・石碑類と共に、滝沢ダム建設に伴ってかつての中津川周辺の地区から此処に移設されたものと推測されます。



龍泉寺・趣意書



遷宮碑



遷座記念碑

また、遷宮碑には「滝沢ダム建設事業に伴い十々六木、滝ノ沢、浜平、塩沢地区の 236 ヘクタールの土地が水没し、112 戸が移転をよぎなくされた。各地域には、神社及び多くの祈碑類が、また滝ノ沢地区には、応永年間（1394 年～1428 年）に建立された龍泉寺が存し、古くから住民に親しまれてきた。これらの移転に関し、昭和六三年八月に龍泉寺補償対策委員会が設立され、事業施行者である水資源開発公団と協議した結果、同公団の協力により、この地に移し水没移転者の心の故郷として、末永く祀るものである。平成四年一月、龍泉寺補償対策委員会、会長：黒沢源次、副会長：山中盛太郎、委員一同」と記され、水没した地区の寺院や石仏等をここに移設した経緯がわかります。

「地図で歩く秩父路」には、「ふるさとの丘公園（平成九年完成）」は旧秩父往還の馬の休憩所だった『馬立場』の峠であった。」と記されています。ここがかつて宮平と大久保とを結ぶ主要な交易路として賑わいをみせた秩父往還の「馬立場」（峠）と呼ばれた馬の休憩場所であったと推測されます。長瀬町在住の実行委員から、旧滝ノ沢地区（旧大滝村）における昭和 54 年の正月行事である三河漫才の写真が提供されました。写真のコメントには「山の中腹の集落の隣から隣につながる細い路地から太夫と才蔵が現れ、居間で正月の挨拶をすると、すぐに座敷漫才が始まる。鳴り物は鼓・胡弓・三味線で静かな佇まいも二人が正月にふさわしい目出度いおどけた言葉がポンポンと飛び出し、山の家が賑やかになり、家人の顔もほころぶ。・・・地元の人達は半世紀の間つかの間の楽しみを味わったが、私たちは一期一会の時間を貰った貴重な体験だった。」と約 50 年も前に奥秩父の山里に訪れた正月の様子が生き生きと紹介されています。既に失われたであろう豊かな民俗芸能に思いをはせることが出来ます。



三河漫才・滝ノ沢逐



三河漫才・せこ道

「ふるさとの丘公園」の出口の車道の両側に、真新しい道標「二瀬ダムへー滝沢ダムへー秩父往還（至栃本）」及び秩父往還「至落合 - 至栃本」が車道を挟んで設置されています。道標の奥には送電線の高い鉄塔が聳えていました。



旧秩父往還・分岐道標



落合への入口・鉄塔



落合への秩父往還道標

「秩父往還・至落合」への道標に従い、車道から離れて夏草を分けて旧秩父往還を下ります。新しい道標が設置されているので、宮平への旧道はそれなりの整備がされているものと推測されました。道標からなだらかな下りとなり「地図で歩く秩父路」に記載のある「コシヨウ坂」と推測されます。「秩父甲州往還」には「小舛坂」の文字が充てられていますが、どのような謂れがあるのか興味深い名前の坂です。緩斜面から水平になった道幅1mほどの歩き易い旧道を辿ると右側に苔むした石垣が残る場所に出ます。「秩父往還いまむかし」に記された「二度ほど小沢を横切りさらに行くと、『弘法ノ一杯水』とよばれていた所に着く。石垣などもつまれているが、今は水が涸れている。・・・この湧水のある窪一帯を『コシヨウ』とよぶところから、この峠道もコシヨウ坂というようになったらしい。」とあり、「秩父往還 - 武田家外伝」には「小舛坂の中腹に清水の湧き出す所があるが、これを一杯水と呼んでいる。」とあります。コシヨウ坂を下ると石垣のある場所につきますが、目印となる石垣があるため一杯水と見当をつけましたが、沢筋ではなく清水が湧く場所とも考えにくく、確定できませんでした。弘法大師の伝説では定番の、全国行脚中に水に困った住民の願いを聞き入れ、錫杖を突いたらそこから清水が湧き出すという伝説と同一の性格と思われます。静まり返った杉林のなか、突然の侵入者に驚いたのか鹿の親子が5～6頭列をなして、旧道を横切って上に駆け登って行くのが見えました。



旧秩父街道入口



コシヨウ坂（?）



弘法ノ一杯水（?）

古道らしく起伏の少ない道幅1mを越える道が続きますが、徐々に道幅が狭くなり、土砂崩れのためか踏み跡程度になる場所もあります。「ふるさとの丘公園」の旧秩父往還入口に設置された立派な道標のため、ある程度の道幅は確保されていると推測されましたが、途中

から夏草に覆われた伐採や林業用の林道へと変わってしまい旧道の面影はありません。GPSにより標高と方向を確認しながら林道を進みましたが、行き止まりになったり、林道の進む方向が反対の二瀬方面に変わったりで、旧秩父往還らしき道はついに発見できませんでした。赤テープや軍手などのヤブ漕ぎ覚悟で調査の準備をしたので、強引に踏み跡を辿って宮平に下ることは可能と推測されますが、旧秩父往還を辿る古道調査の目的とは異なるものと判断しました。旧秩父往還の確認方法としては、宮平から大久保へ登り返す手段も有益と考えられます。



林道へと代わる



林道終点の沢の排水路



林道行止まり

12時54分、今日の旧秩父往還・古道調査は此处までとしました。森林伐採や植林のために新たな林道が縦横に造られ、ヤブ漕ぎの必要はありませんが、旧秩父往還は林道造成により消失した可能性が高いものと推測されます。道標・秩父往還「至落合 - 至栃本」地点の「ふるさとの丘公園」まで元来た旧道を引き返して大久保地区に戻りました。



ふるさとの丘公園



稲荷神社と妙見宮



駒ヶ滝不動尊へ

大久保地区の周辺の旧道は大部分が舗装された車道となっていますが、地区はずれにある大杉を過ぎると、旧秩父往還は草に覆われて旧道の面影を残しています。栃本発電所の送水管の上部を手すり付きの石段で越えます。送水管の橋から見下ろすと国道140号まで真っすぐに急な角度で送水管が下っていて、眼がくらむようです。送水管を過ぎると間もなく赤い鳥居の稲荷社・妙見宮で、旧秩父往還を更に進むと左手に二瀬ダム駐車場へと下る分岐があります。道標がないのと道が不明瞭なので注意が必要です。倒木や覆いかぶさる木々を避けながら下ると間もなく駒ヶ滝不動尊の前に出ます。「秩父往還いまむかし」に「二瀬ダムのすぐ下流の荒川には駒ヶ滝がかかっていた。・・・この滝場は、木材を流す木屋たちにとっては危険な難所だったので、元締めが安全を祈って近くの大木の下に不動尊を祀った。・・・現在は『駒ヶ滝不動』として二瀬入口の国道ぞいに移し、」と記され、不動尊の設置や遷座の経緯が示されています。また、「奥秩父の伝説と史話」に「三不動 二瀬耕地

の駒形の滝に白竜、大達原耕地の不動滝に黒竜、巣場耕地の巣場不動に赤竜が住んでいたといわれる。昔から、これらが大滝の三不動と呼んでいた。白竜の駒形の滝は、二瀬ダム建設によって国道沿いに移転され、・・・昔の人は、不動尊に漁猟の安全を祈願し、祭礼を行い、その前を通過する時は、必ず三種類の草花を捧げて祈ったものである。」と紹介しています。風土記稿には「駒ヶ瀧 大久保組の内にあり、峙立せる岩間より漕ぎて、荒川に流れに入、高二丈五六尺、水勢いとおよく、白日に霧をふらして、炎暑の時といへど冷気を浸せり、」とあります。「奥秩父の伝説と史話」にある「駒形の滝」は、「駒ヶ滝」のことと推測されますが、瀧の表記に違いがありますが気にするほどのことではなさそうです。不動尊の右側に大山祇神の社があり、共に大岩の底の下に鎮座しています。向かい側が二瀬ダム駐車場です。

参考資料

- 歴史の道調査報告書・第11集・秩父甲州往還（編集・埼玉県教育委員会、埼玉県立博物館）、発行・埼玉県県政情報資料室、平成二年四月発行
- 大日本地誌大系、新編武蔵風土記稿（第12巻）・秩父郡・古大瀧村（雄山閣）、昭和四十六年二月二十五日発行
- 明治43年測図5万分の1地形図「三峰」、
- 大瀧村誌、編集・秩父市大瀧村誌編さん委員会、発行・秩父市、平成二三（2011年）三月三十一日発行
- 飯野頼治著「秩父往還いまむかし」（さきたま双書）、平成11年2月25日発行
- 飯野頼治著「地図で歩く秩父路」（さきたま出版会）、2006年12月10日発行
- 太田 巖著「奥秩父の伝説と史話」（さきたま出版会）、昭和58年7月15日発行
- 太田 巖著「秩父往還－武田家外伝」（新人物往来社）
- 国土地理院2万5千分の1地形図「三峰」
- ジオグラフィカ GPS データ

松本敏夫記



二瀬ダムへの道



駒ヶ滝不動尊と大山祇神

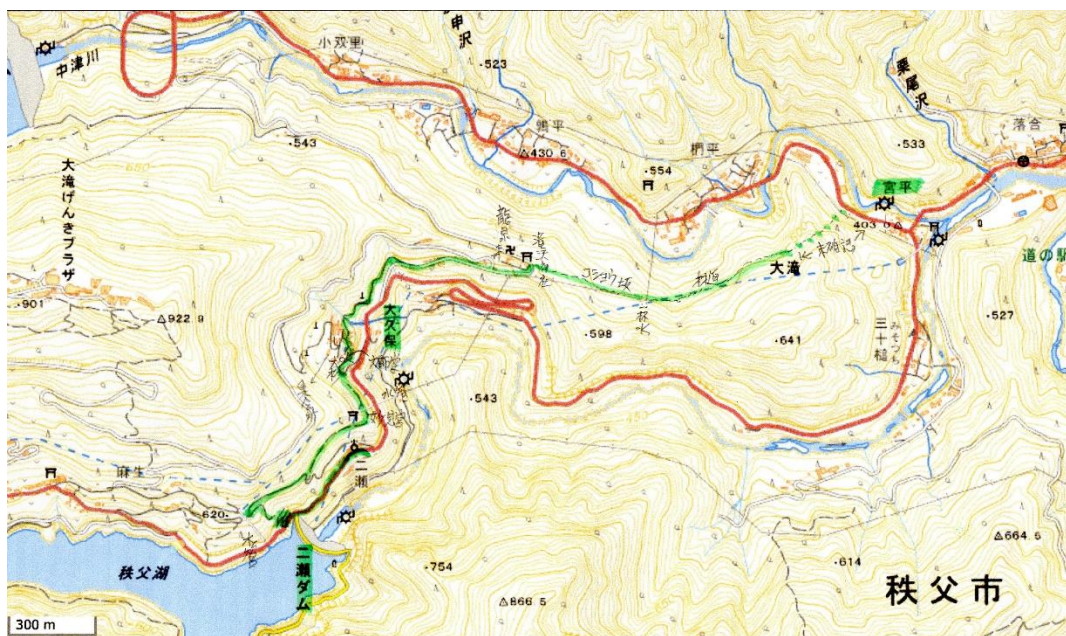


駒ヶ滝不動尊

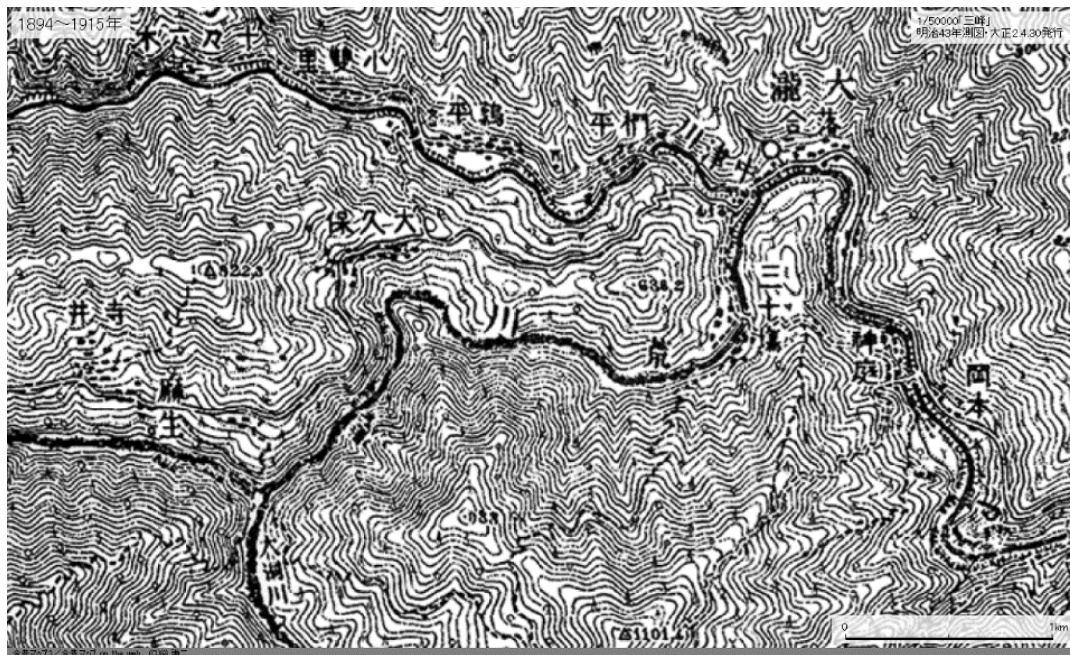


古道調査参加者（3名）・二瀬ダム駐車場にて

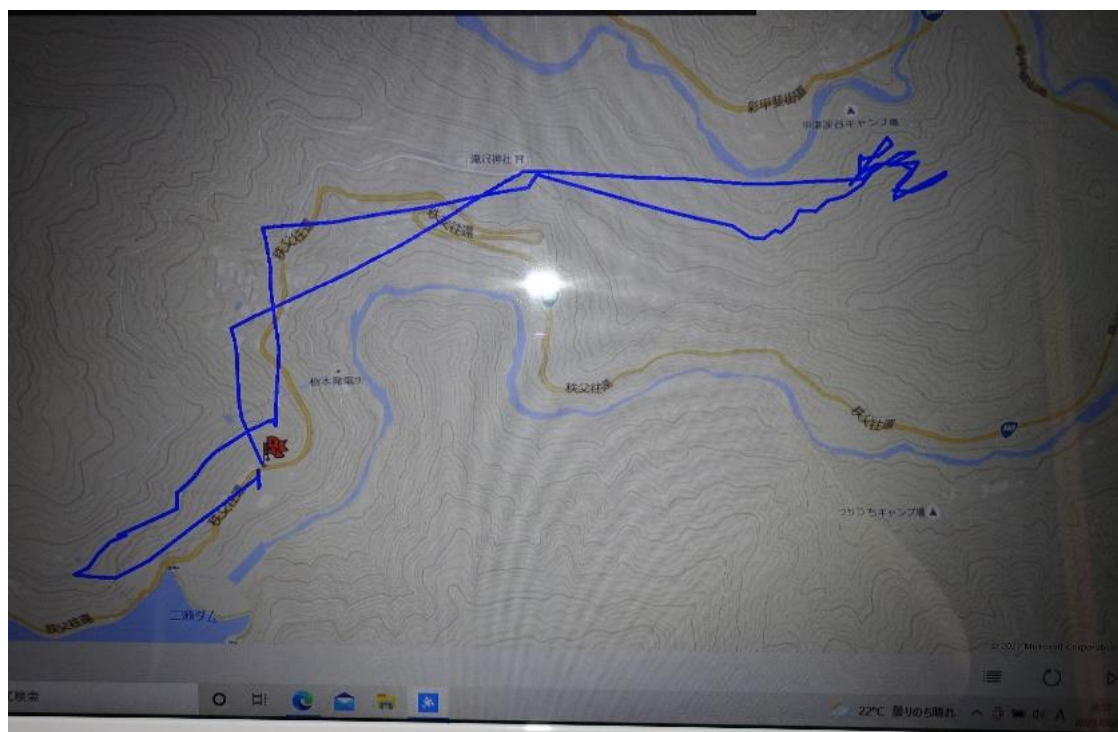
鹿の角ゲット



現在の国土地理院地図



明治 43 年の 5 万分の一地形図「三峰」



ジオグラフィカのトラックログ



「秩父甲州往還」資料